



あれからどれだけの日数が立ったのか、少女はおじさんに拘束され暇を見つけては膣内射精をされる日々を送っていた。

幼かった少女の膣穴は今やすっかりおじさんの形に変えられてしまい、子宮に収まりきらなかったおじさんの精液をまるで物の欲しげな涎のように垂れ流しているのであった。

そんなある日、おじさんがいつもより嬉しそうに少女の元にやってきた。

「季節はずれのクリスマスプレゼントだよ♡」
おじさんはそういうと妊娠検査薬を少女に見せつけた。

少女は妊娠していた

いくら妊娠にはまだ早い年齢とはいえ、毎日のように膣内射精をしていけば当然の帰結である。

久しく感情を見せていなかった少女の顔に悲しみが浮かぶが、おじさんは意にも介さず言葉を吐きつけた
「まずは一人目だね♡」

少女の絶望に沈む小さな嗚咽とおじさんの獣の様な性交の音が今日も部屋から漏れ聞こえるのだった…